

# 「Atlas of Diagnostic Gastrointestinal Cytology」

Associate Professor, Dept. of Pathology, Jefferson Medical  
College, Thomas Jefferson Univ., Philadelphia, Pa.

竹 田 節

獨協医科大学教授 信 田 重 光

Misao Takeda 氏の消化器細胞診のアトラスが出版された。数頁をめくって、まずシマツと思った。この領域の細胞診に関しては、特に内視鏡を用いた方法はわが国の専売特許のつもりでいたが、いつの間にかアメリカの人が英文でこの分野の本を出してしまったからである。

まず Misao Takeda 氏であるが、わが国では細胞診専門家としてはなじみが薄い。英文で手紙を出したら日本語で返事が来た。竹田節氏は1956年(昭和31年)横浜市大卒業後、渡米、ジェファーソン医大で勉学、米国の病理解剖学および臨床病理部門の専門医試験に合格し、1961年(昭和36年)ごろから消化器系の細胞診に従事しておられた由である。この間一時帰国されて、横浜市大中央検査室を設立され、また1976年に帰国され、ジェファーソン医大に留学された大阪成人病センターの田村、遠藤先生の協力を得たと言われる。事情を知れば、やはり日本製であった。

現在の消化器細胞診は、食道、胃、肝胆膵、および大腸に分けて論ぜら

れるが、この本では、十二指腸、膵、および肝胆道に分けられているほかは、分け方はほぼ同様である。それぞれの臓器の章で正常の解剖、組織、およびそれに対応する細胞像、細胞採取法、そして腫瘍、炎症性疾患、各種治療法による細胞像の変化を、それぞれ組織像と細胞写真を対応させて論じ、最後はかなり広範囲な文献が付記されており、現在問題となっている細胞診の臨床上のほとんどあらゆる点が記述されている。これまでの英文の消化器細胞診アトラスは Prolla および Kirsner の著作があるが、それからみると、記述にはやはり十数年の年月の差を感じる。

細胞採取法については、日本のお家芸である内視鏡的細胞診に関する記述が多いが、そのほかの古典的な方法も記載されているので、特に最近細胞診の道に入った人々には参考になる点があろう。最近進歩の著しい肝、胆、膵の細胞診では、PTCD、ERCP、超音波や CT 誘導下穿刺細胞診も記載されており、この領域の記載は恐らく日本人共著者

によるものであろうが、アメリカの専門家たちの関心の並々ならぬものを感じさせる。

本書の内容で特に注目したい点は Benign または Inflammatory conditions (diagnostic pitfalls) の項で細胞診断学上悪性疾患と鑑別すべき細胞像の出現する可能性のある良性疾患での細胞像をかなり細かく記載している点であり、近年わが国でも細胞診断学上ぼつぼつ報告されてきている疾患およびその細胞像がある程度記載されている点は非常に参考になる。細胞診が単に疾患の良悪性の鑑別のみでなく、その本質を細胞像から読み取ろうとする姿勢が強くなるかわれる。

日本人で長年米国で生活している人の英文は、日本人の英語のセンスを理解しているためか比較的平易であることを以前から感じていたが、本書もその意味では非常にわかりやすい英文で書かれ、数百枚に及ぶ細胞のカラー写真も良く染色された、きれいなものが多く、一部標本の乾燥を思わせる物もあるが、全般的に細胞像の美しさが感じられ、頁をめくりながら楽しさを覚える。

日本臨床細胞学会で認定する指導医試験や国際細胞学会の cytopathology 試験を受験しようとする医師、および国際細胞学会技師資格取得の国際試験受験を目指す細胞診技師には特にアメリカの考え方を知る意味で熟読を推奨する次第である。

A4変形 244頁 図16 写真170  
原色図191 1982 ¥18,500 円400

医学書院 刊